

## 林あまりノート

松島 浄

### 一 はじめに

林あまりはエロティック短歌の旗手とも言うべき、大胆な性描写で有名である。また、口語体を使いこなすところやマス・メディアへの登場のしかたなどで、俵万智と並び称されることがある。恋愛文学としての現代短歌を連続して読んできた私としては、林あまりは避けて通れない歌人であり、以前少しだけ俵万智論の中で触れたことはあるが、今回改めて詳細に検討してみたい。

導入として、その時の一節を振り返ってみようと思う。

俵万智の「林あまりと私」という短い短歌批評を一つ紹介してみたい。日頃そんなに他の歌人の歌などを批評はしないだけにめずらしくもあり、興味深く読んだので、これも俵万智という歌人を知る一つの手だてになればと思う。

彼女の見解は、自分と林あまもりが同世代の歌を作る女の子としてしばしば並べられ、「同類項的」に論じられたりするが、実は二人の歌の世界は遠いのではないかというものである。確かに、岩波書店の『岩波現代短歌辞典』の「サラダ記念日の出現」という項目において、筆者の萩原裕幸もまた林あまりの次の歌を引用しつつ、二人の類似性を語っていた。

生理中のFUCKは熱し

血の海をふたりつくづく眺めてしまふ

萩原は、この口語スタイルがもたらす現代人の気分という点と、会話体による思考と記述が一致しているのごとき錯覚をもたらすと言っている。しかし、俵万智は、実はこれよりもずっと以前に同じ生理中の歌を引用し、両者の差異を強調していた。そこでは、「林あまりは〈生理中のFUCK〉という言葉を使ったかったのではあるまいか。しかし、熱いこと、つくづく眺めてしまふ状況に、歌の眼目はない。林作品は、言葉の起爆力に頼りすぎているのではないだろうか。言葉だけではない!?」といった記号の類や横文字や、一種こけおどしの用法が非常に多い」と批判している。

たしかに林あまりの場合、「状況説明に終わっている」歌が比較的多いように思われるし、それに比べると俵万智の歌には、前述したような「心の揺れ」を歌うという根本的姿勢が読みとれると言えよう。

さて、再度この歌を読んでもみると、やはり俵万智の批評は否定できないと思う。「生理中のFUCK」という言葉のこけおどしの用法と、その状況を第三者の目線で客観的に観察している冷静な視点が読めるだけで、作者の想いは残念ながら表現されていない。かすかに読み取れるのは「つくづく眺めてしまふ」という下句の中に、熱中後の二人の虚脱状態が表現されていることである。それによってこの歌は、歌の最低条件を確保しているといえる。これだけを読めば、文学的表現力は弱いと言わざるをえない。当時の評判を見ても、二〇〇〇年に出版された篠弘『疾走する女性歌人』（集英社）や、岩田正『現代短歌愛のうた60人』（本阿弥書店）にはいずれも林あまりは取り上げられていない。その頃のオーソドックスな歌壇ではまだ評価されていなかったということであろう。

しかし、一九九八年に立風書房が出版した『新星十人——現代短歌ニューウェイブ』には、十人の中に入っており、一部では新人として注目されていたことも事実である。実際、穂村弘は、『現代短歌大辞典』（三省堂、二〇〇四年）の中で林あまりのことを次のように語っている。

「ライトバースの先駆的短歌『MARS☆ANGEL』でデビュー。一九八〇年代の若者の時代感覚を、口語を生かした速度感のある文体で描いた。関係性の根源としてのセックス、同性への共感といったモチーフは、その後の歌集でさらに展開を見せるが、張りつめた表現世界は、一貫して宗教的なまでの意識の純一性に支えられている。演劇的な構成意識、口語文体に加えて、二行書き表記や記号の使用といった表現面のラディカルな個性は、強靱なモチーフ意識と相俟って、歌壇外の読者にも幅広い支持を得ている。」

そして今回、筆者も林あまりを取り上げるにあたりつぶさに読み直していくうちに、彼女の奥の深さが感じら

れる作品にも出会うことができ、前とは違った表情が見えてきたように思う。以下、その文学性に注目しつつ、代表作『ベッド・サイド』（新潮文庫版）を細かく読んでみたい。

## 二 林あまりの歌の世界

冒頭の歌から読んでいくと、

直角に見下ろすかたち

うっとりとしている男をあわれむような

この歌も「生理中」の歌と同様、林あまりの特徴をよく表している。絵で言えば「かたち」を描いていて、色彩表現が弱いといったところか。普通だったら、男が上位にあって下の女を見下ろす場合が多いなかで、これは女が男の上に直角のかたちでつながって、うっとりとしている男を見下ろしているという性交の位相が描かれている。問題は下句の「あわれむような」という感情表現が、どこまでその時の女性の心理を表出しているかであろう。よく読むと、この「あわれむ」は、女性の感情の表現というよりは直角に見下ろすという「かたち」の表現なのである。言い換えれば、上位の女性が下位の男性を「あわれむ」位相にあるという、性交のかたちが表現されているだけで、作者自身の想いは直接表現されていないのである。象徴的には、性交のかたちという具体的

イメージを通し、時に女性上位になりうる現代の男女関係の位相が表現されていて、それなりに現代的社会的意味は示されているが、それに対する作者自身の感情表現の質が読み取れないのは残念である。

罪を肩代わりして欲しそうな顔をする男は

つまり祈らずにいられる

この歌の意味を、私は次のように解釈する。妊娠したかもしれないという女の告白に、その責任を全面的にとろうとしなさそうな顔をする男は、墮胎の罪を神に祈ったりしないものである。この解釈を前提にして考察してみると、まず上句の「罪を肩代わりして欲しそうな顔をする男」という歌の部分が気になる。墮胎を罪である意識するのは、キリスト教の信者である作者自身の意識であろうが、そう考えると信仰を持たない相手の男が罪を祈らないのは当然だということになる。これだと妊娠↓墮胎の深刻な事態が信仰の問題にのみ転化されてしまいう平板な歌に終わってしまう。

ここでは思想詩人としての林あまりの歌を読もうとしても、それがあまりにも通俗的な歌に終わっていて、せっかくの題材も生かされていないと思われる。妊娠↓墮胎は、宗教的な罪の問題である前にひとりの男と女の性をめぐる相当深刻な事態であるはずである。そのことを考慮することなく、すぐに罪の問題に転嫁してしまうのは、性をめぐる現実的、具体的問題を等閑視していると思えない。

以上の感想は、次の歌にも相通じるものがある。

林あまりノート

クリスマスイヴに精液はじける国

汚れた雪にまみれて祈る

日本には、クリスマスイヴに若者たちがデートして一夜をとるとするという風潮があるが、クリスチャンである作者はその風俗現象をにがにがしく思っているという批判的歌であろう。キリスト教の記念日を利用して性文化を謳歌する若者達とそれを許容するわが国の宗教文化を自嘲的に歌っている。ただ、この下句の「汚れた雪にまみれて祈る」ということばに託された作者の想いはどう解釈すればいいのだろうか。自分もまた、その性文化と風俗に汚染されているから汚れた雪にまみれるということなのか。それとも同じ雪に降られつつも、自分はひとりの敬虔なクリスチャンとして教会で祈っているという意味であろうか。後者の場合だと、ここでも若者の性文化が内面化されることなく外在的に批判のまなざしが向けられ、若者の性風俗と作者の宗教文化は交差していないことになる。

さて、ここまででは、やや批判的な解釈のものを列挙したが、もう少し違った趣をもって読むことができるものも取り上げてみたい。

死に至る罪を今夜も犯しつつ

クローディアスの祈り呟く

「クローディアスの祈り」とは、シェイクスピアの戯曲『ハムレット』の登場人物で、先王である兄を毒殺し、その王妃と結婚したデンマーク王がその犯罪が発覚することを怖れて祈ることを意味している。二つ前の歌とは罪の内容は違うけれど、兄（先王）の亡霊が出てくるところに、性交―避妊、妊娠―墮胎の罪意識を重ねてこの歌を作っている可能性がある。またこの歌には、三角関係にまつわる罪の意識が表現されているようにも読みとれる。

それでも二人のベッドは心地良い

ただそこにある無意味なほほえみ

この歌の眼目は下句の「無意味なほほえみ」であろう。私はこの歌の背後に、かなり深刻な性愛関係の複雑な状況を想定してしまう。つまり、すでに二人の恋人の関係は崩壊しているにも関わらず、性的関係のみ続いているとしたら、その二人の間に発生する情緒は、まさに「無意味なほほえみ」しかないということである。

無意識にのりこえたらしい悲しみが

つながるたびに押し寄せてくる

この歌も、前の「無意味なほほえみ」の歌と同様の状況をふまえ、さらにその後の時間の推移が想定された歌

ではないかと思われる。別れと対象喪失の悲哀を乗り越えて、やっと取り戻した平常心の中に、また新しい恋人なり元彼が登場して、忘れかけていた辛い喪の時間をふたたび思い出してしまうという歌である。時間の経過とともに忘却した悲しみは、いとも簡単に甦ってくるということであろう。

大泣きのわたしの頭は醒めていて

泣かないあなたの赤目も見える

この歌の場合も、泣いている自分と醒めている自分が同居していて、相手の男の様子までしっかり見ているという「わたし」の不思議な精神構造が表れている。感動している心と認知している頭脳が分裂していることを正直に告白している女性のしたたかさが表現されていて興味深い。

とびだしてくる声の不思議は水鳥の類か

あとからおもうひとつに

ここでは、突然自分でも意識しない中で飛び出してくる声の存在に、我ながら驚いている女性の心理を突然飛び立つ水鳥のイメージに託して表現しているあたりは、この作者の比喩の鋭さを表している。そして、その自分の中の不思議な情動を素直に表現している優れた歌と言えよう。



### 三 林あまりと比喩表現

『ベッドサイド』というテキストは、文字通り、男と女の関係＝対幻想をテーマにしているだけに、ほとんどの歌が性愛を対象にしている。それらは、大雑把にいうと、ふたりの関係ないし相手の男性について表現されている場合と、もっぱら自分自身の心と身体を対象にして歌われている場合に分けられる。そこでは様々な比喩が用いられ、林あまりの歌の世界を豊かにしている。

ここでは、そうした優れた比喩表現の歌をとりあげて分析してみたい。

#### 1 関係の中の喩

まず、関係や状況に伴う比喩を取り上げたい。

シャンプーの泡でふんわり髪を包む

そんな仕草で撫なでられている

女性ならではの上質な比喩表現でつくられた歌で、秀作といえる作品であろう。この歌集の読みどころは、こうした微妙な性愛にまつわる女性らしい心理描写にあり、その意味では次の歌も男性ではまず作れない歌だと思

われる。

たっぷりとかまわれた夜は

あなたから花束が届く夢などもみる

女性は好きな男性から花束を贈られる夢を本当に見るらしい。まさにこの歌は、性愛の究極の瞬間ともいえる境地を描いたもので、ここまで素直に愛を歌い上げた歌人もめずらしいのではなからうか。林あまりの面目躍如たるところである。

いつも同じ音符で間違うピアノのように

早過ぎることをあやまるあなた

男は事前には色々と考えていても、いざ実行する段になるといつもワンパターンになってひとり相撲をとってしまうところがある。この歌はそんな男性との微妙な違和感を歌っていて記憶に残る作品である。

張り替えたガットの光る新学期

あのひとのいないコートは広い

これは私の好きな歌のひとつである。作者自身は、この歌は、あこがれの先輩が卒業したあとの寂しさをうたった歌だと言っているが、私の解釈は、若干違っている。私の少ないテニスの経験からしても、張り替えたガットのラケットがボールをいかに遠くに飛ばすかは想像がつく。普通でもコートを飛び出しやすい球を、コート内に打ち込むのは、微妙な手加減が要求されるところがテニスの難しさである。この歌は、この複雑な心理を、男女関係に応用していると想わせるところがあり、ひとつの付き合いが終わった時期の開放感が、のびのびとボールを打てる心境に転化されているところが想像できる。歌もまた作者の手をはなれるとひとり歩きするものである。

目を閉じなければすこしもよくない

視界は「答えろ、答えろ」と迫る

目を閉じながら自らの感性に没入しようとする女と、その相手の表情を観察することでエロティシズムを追求しようとする男の性愛心理の違いをこれほど端的に表した歌も少ないだろう。自閉と観察のダイナミズムの中で、男は、エロティシズムを確認するために、自閉しつつある女の表現を見ようとする。この無言のかけひきの中で二人の男女の性愛行為は相互作用を繰り返していく。

男・女、夫・妻――。

クッキーの型からはみだす生地もまた生地

林あまりノート

人間は、社会的文化的枠組みによって形式化された類型から常にはみ出し、逸脱するものである。それをクッキーの型からはみ出す生地ととらえた作者の柔軟な感性とするどい認識は、まさに文学的想像力としか言いようがない。この矛盾と葛藤の中にドラマを見て表現するところに文学の存在価値がある。この歌は、社会学的観察と認識に比重がかかりすぎているけれど、この観察の上に文学的作品が立ち上がって来ることを予感させるものがある。

## 2 身体表現の喩

次に、作者の身体感覚に特化したと思われる比喩表現を分析してみたい。

首すじをゆるくかまれて

あ、とおもう間もなくあふれはじめる涙

いいパンチもらったようにゆっくりと

からだのちからが抜けてゆくキス

この二つの歌は、どちらも身体表現にまつわる喩であるが、前者の「涙」の喩はいささか苦しい喩の表現になっているのに対し、後者の「パンチ」の方は、あざやかな喩の表現になっている。いいパンチをもらおうと一瞬失神

やめまいを起こすものであろうが、後者の歌は、このくらいの強烈な打撃をキスは発揮することを物語っている興味深い。ボクシングのテレビ中継でノックアウトされる場面のスローモーションをみているような、まさに「ゆっくりと」たおれていく様子を彷彿させる。これもまた女性ならではの神妙な性愛現象ではないかと思われる。

顔のある花は苦手だ

水仙と目を合わさずに男に会いにゆく

この歌は冒頭だけを読むと意味がとりにくいのであるが、次の「水仙」までくると納得できる歌になる。言うまでもなく、水仙＝ナルシスのことであり、自分の顔を水面に映してそれに惚れる少年の物語である。つまりこの歌は、「顔のある花＝水仙」は好きではない、なぜなら鏡に映して、その顔の美しさを確認する花だからである。この歌には、いくつかの言葉が連鎖していることがわかる。顔、花、鏡、化粧といった言葉が水仙という花とその物語に仮託されてつながっている。その言葉のつながりをたどることができれば、この歌はこれまた女性特有の複雑な心理をふんだ歌として観賞できることになる。

### 3 水とエロティシズム

電話が鳴る 青い音ならあなたから

部屋いっぱい流れこむ水

林あまりノート

林あまりノート

さあ波に乗らなくては さざ波を二つ見送る

大きい波、来た

気がつけば岸に打ち寄せられていて

横にはあなたも倒れている

それぞれの足の錘おもりのやさしさよ

抱き合って揺れる湖の底

これらの歌は、「水底みなそこの時間」というサブタイトルの中から抽出したものである。人間は本来、水の中＝羊水から生まれ出るものであり、水への親和性が高いものである。だから、人は水中にいると癒される存在なのである。水に入ること、最初は抵抗がありストレスを感じるものであるが、水圧に慣れてくると地上より気持ちよくなってきて、すっかりくつろいでいたりする。性愛の心地よさを水に託し、エロティシズムがたくみに歌われている。

ただ静かに共にたゆたうこと叶わず

泳ぎをやめれば沈むばかり

水の中でたゆたうためには、微妙に身体を動かしていなければならぬ。二人が共にたゆたうためには、二人が同じリズムで静かに泳ぐ必要があるわけで、それをどちらかがやめるかリズムが合わなくなると共にたゆたうことはできなくなるし、動きを止めると身体は徐々に沈んでいくものである。性愛もまた二人の波動というかりズムが大切になる。男女の性愛の差異も含まれているのかもしれない。

ここだけは安全地帯

泳ぎ着くベッドは高く広いのがいい

この歌は今までの流れとは若干違い、性愛関係Ⅱ対幻想の社会的位相を語っており、その視点が客観性をおびている。もっと言えば広い社会生活の中で家族という集団が占める位置と役割が問題になっているともとれる歌である。性愛関係としてのエロス空間は、社会的生活空間の中でも一段高い位相に隔離され保護されるべきものだという社会認識を作者が持っているということである。それはあたかも社会的に漂流している現代人が、ひとときの休息と安全を確保するためのブイのような「安全地帯」なのである。われわれは、その場所と空間に憩うことによって、英気を養い、ふたたび現代社会という荒波の中に泳ぎ出るのである。だからこそ、その「ベッド」は流れから一段高い広い空間であるべきなのである。

#### 四 歌に表現された同性愛の世界

最後に、『ベッドサイド』の中でも特異な歌のいくつかに触れてみたい。それは、ベストセレクション（一九八六—一九九九年）として収められたもので、『最後から二番目のキス』（一九九一年）から収録された歌のことである。この歌集には女性を主人公にした歌が多く、中には同性愛的な想いがこめられた歌も含まれている。例えば、こんな歌がある。

花びらを持つ者どうしの性愛も

春のさびしき華やぎのなか

美しいくぼみを持っていることを

欠落とする世の人もあり

前者の歌は、「花びら」↓「春」↓「華やぎ」ということばの中に、「性愛」と「さびしき」という異質のことが挿入され、最後はふたつの語群がいずれも「華やぎ」ということばに集約されている。この歌は、美しい色調をおびた絵画的な作品で、春の光と影が微妙なコントラストをみせて表現されている。花びらという比喩に



よって表現された女性性とその女性同士の性愛を表現した優れた作品だと思われる。

後者の歌は、『古事記』に出てくる有名な国生みの神話の個所にある、女神イザナミのことばを連想させる。「わたしの身体は一個処欠けているところがあります」とイザナミは言っているが、私はこの歌は単なる古典的な国生みの神話の物語とは読まない。つまりこの歌は、身体的に欠落している女性が、一個処余計などのある男性によって、刺しふさがれる、存在であることを逆手にとって、その欠落した身体を持った女性同士が男性を排除して愛し合うことを言外に表現した作品ではないかと読むのである。古典的な対幻想の物語から、いまやはるか遠くまで来た現代には、女同士の性愛が公然と表現とされ、認知される時代になっている。

「ボタンをかけるみたいにあたりまえなのね」

わたしが男と寝る日は責める

この歌の「責める」は、誰が誰を責めるのか？ 女ことばのせりふからして、それが女性であることはわかっていたが、一見「ボタンをかけるみたいに」「寝る」男への「責め」とも読めるが、同性愛的な歌として読むと違ってくる。つまり、主人公の女性から見ると、相手の女性は男との恋愛は当然のこととして受け止めており、そのような異性愛を自明のこととする女性への苛立ちが上句に込められている。その「ボタンをかけるみたい」という比喩がこの歌の眼目であり、それを読みとらないとこの歌の価値は存在しない。

撫でさすり 暮れてゆくこと――

それどころじゃないふたりにはそれがすべてで

この歌は、お互いに「撫でさすり」あっているうちに、日が暮れていくといった何の変哲もない作品のようである。それが異性愛のような一定の限界がある愛ではなくて、いつ終わるともなく続くレズビアン之歌だと読むと、意味深長なところがあって興味深いものがある。この「とりとめのなさ」がレズビアン「涯しなさ」を表している。

目を見ずに話す少女に平手打ち

のようなくちづけ もう泣かないで

穴だらけの耳をもつ少女を抱き寄せて

ピアスのガンで撃ちぬく心臓

するするとびわの薄皮ぬがすとき

少女のようなうすい香がたつ

最初の歌は、初め私は読みきれてなくて、男女の異性愛の歌として、「平手打ちのような」という比喩の歌として受け取っていた。しかし、これもまた女性同士の愛の歌として読み直すと、一層ふくらみを持った歌として読むことができる。また「平手打ちのようなくちづけ」という比喩表現も、上句と下句にまたがった巧妙なテクニクが駆使されていることが分かり、作者の歌人としての才能を思わせるところがある。

二番目の作品も、ピアスのガンで耳に穴をあけるような、どこか、やさぐれた少女を抱き寄せて、同性愛というガンで今度は彼女の心を撃ちぬくという歌である。先述の「平手打ち」する歌と同様の年上の女の少女に対する「仕掛け」誘惑のメカニズムが表現されている捨てがたい一首になっている。

三番目の歌は、少女の服を脱がす比喩としてびわの皮を剥く動作をもつてくるところなど、作者の想像力はさえている。かたい桃などとは違ってびわの皮はきれいに剥けるものである。しかもびわの香は、かすかなうすい香である。したたりおちる果汁のイメージまで想像させられるほどで、エロティシズムの香がただような秀作である。

## 五 おわりに

林あまりと俵万智を並べてみると、共通性としては二人とも一九六〇年代に生まれ、一九八〇年代に作品を発表し始めた、言わば「高度成長歌人」であること、しかもその文体は、口語体で日常生活の断片をさらりと表現するところにある。また対象となる恋愛についても、非日常的な時間としてではなく、日常化した空間として

描かれている。しかし、俵万智の歌においては現代の多様化した恋愛文化の中における自立した女性意識が強く、それが支配的な現代家族に対する抵抗と反発になって、結果的に「不倫関係」が形成され表現されているのに対し、林あまりにも同様の恋愛意識は共有されながらも、多感な時期を女子校で過ごすという経験もあつてか、「同性愛関係」が表現されているのが違いとして印象づけられているように思う。

ところで、私は最初、俵万智の林あまりへの批評を参考に彼女の歌の「状況説明」的な特徴にふれ、この特徴は否定できないと思ったけれど、そうした歌が作られる背景を考えると腑に落ちるものがある。林あまりは、一五歳のときに洗礼を受け、高校も敬虔なミッシヨンスクールを卒業している。彼女の歌の背景には感情表現を抑制したパーソナリティが想定され、その上にキリスト教信者としての倫理が一定の役割を果していたのではないかと想像するのである。つまり、それが客観的な対象を冷静に描写する作家の姿勢に表われているのではないだろうか。しかし、こうした視点を持ちつつも、その後の彼女の歌を詳細に読み進めていくと、例えば、次のような作品にも出会うことができる。

一日をともにすごせば

これ以上なくゆるやかに欲情きざす

日常的なありふれた人間関係の中で男女の恋愛感情が自然に発生する過程を、特に難しいことばを使うことなく、さらりと表現しているところなど秀作といえる作品である。特にこの歌などは、単純に「状況説明」的と

批判してしまうことができない優れた面があることを見せてくれる。

林あまりと言えば大胆な性的描写が注目されがちであるが、ここまで読んできたように、そうした性愛表現の中にも優れた比喩表現の歌があつて、文学的にも優れた価値表現を実現していると思われる。

かつて批評家の桶谷秀昭は、文庫本『MARS☆ANGEL』の「解説」の中で、「カーテンの向こうはたぶん雨だけどひばりがさえずるようなフェラチオ」を引用して、「はかなく、むなしく、しかも悠久の魂においてくりかえされる男女の痴態。おもしろうてやがてかなしい恋のてんまつ。さういふむかしから幾度もくりかえされた、陳腐といへば陳腐な主題を前景に描きながら、ほんたうの主題、背景は読者にかくされてゐる。おさらく作者にもかくされてゐる。」と言っている。つまり、この歌の場合、かなしみの前景はかくされており、その奥にはキリスト者の放棄の構造がかくされていると言っている。言い換えれば大胆な性的描写の前景に、放棄に伴う平明な思想が潜んでいるということである。一考に値する考察であろう。

#### 参考文献

林あまり『ベッドサイド』（新潮文庫）

林あまり『最後からの二番目のキッス』（河出書房新社）

萩原裕幸「サラダ記念日の出現」『岩波現代短歌辞典』（岩波書店）

和倉亮一「林あまり」『現代短歌大事典』（三省堂）

桶谷秀昭「解説―歌人、投身吠成仁の志」林あまり『MARS☆ANGEL』（河出文庫）

付記

林あまりのプロフィールを紹介しておきたい。一九六三年生まれ。一九七八年、キリスト教の洗礼を受ける。一九八一年、恵泉女学園高校卒業。一九八五年、成蹊大学文学部日本文学科を卒業。この間、故前田透に師事し、短歌を学ぶ。大学在学中にマガジンハウス『鳩よ!』でデビュー。一九八六年、第一歌集『MARS☆ANGEL』刊行。その後、『ナナコの匂い』『最後から二番目のキッス』『ショートカット』『ふたりエッチ』『ガールリッシュ』などの歌集を出版。一九九八年に『ベッドサイド』（新潮社）を出版し、これが文庫本化された時（二〇〇〇年）に、後半にそれまでの歌集から「ベストセレクトション」をまとめる。その後、二〇〇二年に『スプーン』、二〇〇三年に『LOVE&SWEETS』が刊行される。